

『愛されベータに直情プロポーズ』

著：若月京子

ill：明神 翼

旅行すると決めた悠真は、大慌てで鞆に着替えを詰め、旅行の日を迎える。

ライアンにせっかくだから朝食は駅弁が食べたいと言われたので朝食は摂らず、入社するとき  
に将宗がホテルまで悠真を送ってくれて、そのままライアンを乗せて東京駅へと向かった。

『いいか、ライアン。悠真くんと二人きりだからといって、無体な真似はするなよ。くれぐれ  
も、約束は守るように』

『分かったと言っているだろうが』

『悠真くんが泣くと、悠希も泣くからな。くれぐれも——』

『しつこい！』

あまりにもクドクドと言われ、ライアンは辟易を通り越して怒り始めている。

どうやらこのために、将宗はいつもより早出してでも送ると言ってくれたらしい。

駅に着いたときにはライアンはあからさまにホッとして、さっさと車を降りてトランクから荷  
物を取り出していた。

悠真は送ってくれた礼を言って車を降り、すでに写真を撮り始めているライアンに苦笑する。

『煉瓦造りが実に美しい。二階までが保存で三階は復元らしいが、とても自然で見事だ。ここの  
ホテルのドームサイドに泊まりたかったんだが、あいにくと空いていなかったんだよ』

『便利な場所だし、駅を行き交う人が見られるから人気があるんだよね。それに東京駅はデパー  
トもあるし、駅の構内には有名店が集まっているから美味しいものだらけだよ』

『ほう、そうなのか』

『朝から開いている店もあって、一週間いてもご飯に飽きることはないと思う。和洋中に加え  
て、ラーメンストリートもあるからね。すごく並ぶけど、客の回転が早いし、美味しいんだよね  
ー』

『では、帰りにそのラーメンを食べてみたいな。ヌードルだろう？ ロンドンで食べたのは、あ  
まり旨くなかったが……』

『そうなんだ。じゃあ、試してみるのはいいかも。煮干しだしとかじゃなければ、口に合うんじ  
ゃないかな』

『煮干しとやらがどんなものか分からない以上、なんともいえないが……』

『外国の人には、あんまり馴染みがないと思う。口に合いそうなものを選ぶね』

『ありがとう。——よし、もう充分撮った。暑いから、中に入ろうか』

『うん』

新幹線のチケットを買って、売店で駅弁を選ぶ。

『種類が多すぎる……』

『これだけあると、迷うねー。どれにしよう』

いろいろ食べられる幕の内か、ガッツリ肉系か——うんうん悩む悠真の横で、ライアンはさっさとその二つを選んだ。

『二つとも食べられるなんて、ずるい!』

『ずるくない。……が、肉のほうは私のを分けるから、たくさん入っているのにすればいいんじゃないか?』

『ありがとう! そうする。やったー』

ライアンがいればどちらも楽しめるのかと、悠真はニコニコする。そういえば、谷根千の食べ歩きでも、いろいろと食べさせてもらった。

駅弁を買って新幹線に乗り込み、動き始めると同時にいそいそと包みを解く。

まわりでも駅弁を朝食代わりにしている客は多く、中にはビールの缶をプシュッと開けている姿もある。まだ朝なせいか空いていて、ビジネス客と半々といった感じだった。

『駅弁、久しぶり〜』

『……これは、肉の種類が違うのか?』

『えーっと……肉は一種類。挽き肉と細切れで、触感と味付けが少し違うって書いてある。ブランド牛で、ライアンの好きな甘じょっぱい味だよ』

『それは楽しみだ。ユーマ、食べられるだけ持って行っていいぞ』

『はーい。ありがとう』

口を付ける前の箸で、両方の肉とご飯を一口分ずつもらって蓋に移す。

『それだけでいいのか?』

『幕の内もあるから、たくさんは食べられないよ。ちょっと味見できるのが嬉しいんだ』

それには、ライアンの頼もしい胃袋がありがたい。

悠真は幕の内弁当とライアンに分けてもらった分で満腹になり、あとは背凭れを倒してのんびりとした気分で車窓を眺めることにした。

事前の調べで富士山側の席を取ったから、勇壮な姿も楽しめた。

キャッキャッとしゃいで京都駅に着き、ライアンはここでも時間いっぱいたっぷり写真を撮ってからタクシー会社が指定した待ち合わせ場所へと移動する。

そこにはすでに運転手が待っていて、ライアンの名前が書かれたボードを持っていた。

「こんにちは〜。お世話になります」

悠真が声をかけながら、ライアンのスマホに表示された予約番号の載った情報を見せると、運転手はホッとした顔になる。

「日本の方がご一緒なのは、ありがたいです。私の英語はまだまだなので」

「ライアンも日本語はまったくなので、ボクが通訳しますね」

タクシーは三日間貸し切りで、予約時にライアンが行きたい場所を提示したため、旅程を立て

てくれているという。

暑い中で電車やバスを待たなくてすむし、座っているだけで目的地に着く。

涼しいタクシーの中に入ってホッとしていると、運転手がにこやかに話しかけてくる。

「それにしても、最初にリストをいただいたときは、回りきれないと頭を抱えました」

「そうなんですか？」

「はい。数が多かったのです。おまけに普通、観光では行かない国際会館やコンサートホールが入っていましたから。市役所まであったので、もしかしてただの観光ではなく、住むための準備かもしれないと思っていたんですよ」

「市役所？ もしかして、建築的に珍しいとか？」

「そうですね。中央が塔になっていて、左右対称のレトロな建物です。一見するとフランスとかイタリアとかにありそうな感じなのですが、あちこちインド風だったり、イスラムっぽかったり。その後で建築士の方とお聞きしまして、ホールなんかも建物を見るだけだからそう時間はかからないとお聞きしてホッとしました。おかげでご指定いただいた場所はなんとか日程に組み込みましたし、仲間からいくつか零れ話も聞いておきました」

「それは喜ぶと思います。博物館や美術館に行っても、展示物じゃなくて建物ばかり見ていましたから」

「京都は古い建物が多いですし、意外と建築士のお客様は多いとのことでした。釘を使わない建て方や、腐食を防ぐための、石の上に柱を載せるやり方が珍しいんだそうです」

「へえー」

悠真が運転手と会話をしながらライアンに通訳すると、ライアンはうんうんと頷く。

『湿度の高い国なのだから、石造りにしたほうがいいと思うんだが……木造はすぐに腐るだろう？ そうしないための工夫がすごいな。日本のカンナは、芸術品だといわれている』

『カンナが？』

『ああ。透けるほど薄く木を削れるなど、信じられない。本当に、日本の刃物はすごいな。さすがはサムライの国だ』

『あー……なんか、外国の人っぽい言葉。確かに日本の刃物がよく切れるのは侍のおかげなんだけどさ。士族が廃止されたせいで、日本刀を造ってた人たちが仕事をなくして、包丁やハサミなんかを造り始めたんじゃないかな？ 元は刀鍛冶をしてた人たちなんだから、そりゃあよく切れるよね』

それからタクシーは近いところから順に回り始め、ライアンが張りきって写真を撮りまくる。

運転手はその道すがら、調べておいてくれた建築秘話や、改修の際の苦労話などを話してくれた。

知らない単語が多くて通訳するのは大変だったが、スマホの翻訳機能を駆使してがんばった。

ライアンが指定しただけあってどれも面白い建物ばかりで、生粋の京都人だという運転手も興味を持ってもらえるのが嬉しいらしい。

そして昼食をお任せにした結果、朝と夜が和食では外国人にはつらいだろうからとのこと、

評判のいいフレンチ店に予約を入れてくれていた。京野菜などを使って、和テイストを取り入れているらしい。

観光客慣れした京都だけあって、英語のメニューもあるから助かる。どうせならということでシェフのお任せを頼み、ライアンはグラスのシャンパンも頼んでいた。

『昼間っからシャンパン！ お貴族様って感じでいいね』

『普段は飲まないぞ。バカンス中で、運転をする必要もないからだ。それに日本の夏はとても暑いから、冷えたシャンパンがとても旨い』

『それには同意。ボクはジンジャーエールだけど、これ、ちゃんと搗り下ろしたショウガが入ってて、すごく美味しい。炭酸って、夏に合う飲み物だよなー』

前菜として出てきたのは、新タマネギのムース。口の中でトロリと溶けて、甘みが強い。

『これは……旨いが、ずいぶん甘いな。砂糖を入れているのか？』

『新タマネギは、甘いんだよ。コンソメの塩気で引き立っているだけで、砂糖の甘さじゃないと思う。んー、美味しい』

ランチなのに結構な値段がするだけあって、素材はかなりいいものを使っているらしい。

次のカルパッチョとフォアグラのテリーヌには野菜がたっぷりと添えられ、小さなキュウリのピクルスやニンジンのラペも美味しい。

ヒメジのポワレは二人とも初めて食べるが、淡白な川魚にあっさりめのクリームソースが合っていた。

そして短角牛のステーキには、赤身肉の旨さを見せつけられる。

悠真はコース料理ということで一番少ない百グラムにしたが、あまりの美味しさにもう少し多いのにすればよかったと思ったほどだ。

もともと、これにも焼き野菜が添えてあるし、全部食べ終わるときには満腹だったので、残念ながら気持ちほど量は食べられない。二百グラムのステーキを簡単に完食したライアンがうらやましかった。

『……ああ、素晴らしく美味だった。ユーマのところで食べたローストビーフとはまったく味が違って、驚いた』

『ウシの種類が違うから。松坂牛は霜降りが有名で、短角牛は赤身が有名なんだよ。将宗さんもお坊ちゃまだからそういうのに細かくて、兄さんと勉強したんだ』

『そういえば、ハンバーグやエビフライも美味しかったな』

『立派なエビと、いい挽き肉を使ってるもん。あのマンションの近くって高級スーパーしかなくて、お肉を買うの、勇気がいるんだよね』

『あの辺りの地価はわりと高いほうだからな』

『……ボクの的には、「ものすごく高い」んだけど？ ライアンは違うんだ……』

『ニューヨークの高さに比べるとな』

『そりゃあ、世界一高いところと比べられたら……あれ？ でも、ニューヨークって、ブロードウェイを目指すような人たちも住んでるよね？ 家賃、払える？』

『何人かでシェアをして住んでいるんだろう。信じられないほど狭いのに、二千ドルすると聞いたことがある』

『へー』

ライアの言う『信じられないほど狭い』がどれほどの狭さなのか分からないから、二千ドルと聞いてもピンとこない。

都内の便利なところで一人暮らしをしようとする、七、八万円かかると聞いたことがあるから、高いなと思う程度だ。

「モモとメロンのタルトでございます。モモのシャーベットを添えております」

「うわあ、美味しそう」

デザートは別腹というとおり、満腹だったのにちゃんと美味しそうに思える。

一口食べればモモのトロリとした甘さにカスタード、タルト生地が加わり、うっとりする味わいだ。

『ああ～すごく贅沢な味』

『日本の果物は本当にすごいな。バカ高いだけはある』

『ライアの言ってるのは、デパートのじゃない？ スーパーはもっと安いよ。もちろん、その分品質はちょっと落ちるけど。デパートに置いてあるのは、最高級品だから』

『二百ドルのメロンや、一粒十ドルのイチゴがあったな。信じられない値段だ』

『大丈夫。あれは、ボクも信じられない。メロンは桐の箱に入ってるね、夢のように美味しいんだよ。二百ドルの価値があるのかは分からないけど、ものすごく美味しいのは確か』

『食べたことがあるんだな』

『うん、もらいもので。あれ、自分で買う勇気は出ないと思う……』

『それは、ぜひ食べてみないと』

『えっ、それは、あれを買うっていうこと？ 自分で食べるために？ それなら高級スーパーで五十ドルくらいのを買ったほうがいいと思う。値段は四分の一でも、味は四分の一じゃないよ。一個五十ドルのメロンは、すごく美味しいはず』

『しかし、実際に食べてみないと二百ドルのメロンについて語れないじゃないか。二百ドルと五十ドルの違いがどんなものかも分からない』

『それはそうかもしれないけど……五十ドルのメロンも充分高いからね？ うちがスーパーで買ったメロンは七ドルくらいで、それなりに美味しかったし。将宗さんのところに来てからは二十ドルにランクアップして、充分うっとりする甘さだよ』

『ほうほう。二十ドルで……それは、これより甘いのか？』

今食べているメロンのタルトを指さされ、悠真は声をひそめて答える。

『甘いと思う。コース料理のデザートに二十ドルのメロンは使えないんじゃないかな』

『なるほど……それもそうか』

『これも美味しいけどね。デザートとしてバランスよく作られてるから。メロン単体で食べるのとはちょっと違うかも』

『ふむ、確かに』

甘いものも好きなライアンは頷きながら綺麗に食べ、食後の飲み物として紅茶を選ぶ。

『やっぱり、紅茶はイギリスのほうが美味しい？』

『そうだな。紅茶に適した水だから、根本からして違う。けれどそれ以外は、日本のほうが旨い』

『それはよかった。日本の食べ物は、ライアンの口に合うみたいだもんね』

好き嫌いが無いらしいライアンは、何を食べても美味しいと健啖ぶりを発揮している。和食ブームのおかげで醤油やカツオだしに舌が慣れているせいか、今のところ苦手なものはない。

ウナギはまずいと信じられないことを言っていたライアンに美味しいウナギを食べさせたいし、今や海外にも愛好家がいるというラーメンもあれこれ食べさせてみたい。美味しそうにたくさん食べてくれるライアンは、とても好ましかった。

優雅で贅沢なランチを終えてタクシーに戻り、観光が再開される。

ライアンが指定した建築物は写真に撮るのが目的なのでそれほど時間はかからず、最後に観光らしい観光である清水寺が持ってきてあった。

さすがに、今までのどこよりも混んでいる。人でごった返すという表現がピッタリで、歩くのにも苦勞するありさまだった。

『すごい人だな』

『外国の人、多いねー』

『着物がちらほらいる……あれは素敵な民族衣装だ』

『夏だからかな。着物より、浴衣のほうが多いね。えーっと、着物の簡単バージョン？ 生地も綿とか麻だしね』

『……そういえば、以前パーティーで見た着物はシルクだった気がする……』

『最近では、洗濯できるようにポリエステルもあるらしいけど、パーティーならシルクだろうね。家で洗濯できないから大変みたい』

『シルクは扱いが難しいからな』

『うちの母も持ってるけど、滅多に着ないよ』

『持っているのか？』

『うん。三枚か、四枚。たまに虫干ししてる』

人を避けながら本堂へと向かうのだが、やはりライアンのエスコートは完璧だ。密着にならない程度にくっつき、ぶつかりそうになると庇ってくれる。

階段があれば手を貸してくれるし、それをごく自然に、甘く優しくするのだから悠真はたびたびのぼせそうになった。

将宗と同じ色の青い瞳なのに、将宗とはまったく違う。将宗に見つめられてもなんともないのに、ライアンに見つめられると気恥ずかしくてたまらなかった。

外国人が少なくないとはいえ、やはりライアンは目立つ。

飛び抜けて整った容貌と、アルファならではのキラキラとした雰囲気周囲の目を引きつけて

いた。

当然のように、ここでも女性に声をかけられてしまう。

『こんにちはー。どちらから来たの？ 私たちはフロリダなんだけど』

金髪と赤毛の、二人組の美女だ。フロリダから来たからなのか、日本の夏がひどく暑いからなのか、タンクトップにミニスカートという露出の多い格好をしている。

胸の開きが広くて、谷間に目をやらないように気をつけなければいけないほどだった。

『私たちも二人で、初めての日本なの。一緒に回らない？』

『二人より四人のほうが楽しいよ！』

そう言いながらも二人の目はライアンにしか向いていないし、キラキラというよりギラギラしていて怖い。快活な口調とは違い、獲物を見る肉食獣の目だ。

モテてうらやましいというより、がっついていて怖いという気持ちのほうが遥かに大きい。

ライアンや将宗はいつもこんな目を向けられているのかと思うと、アルファもそんなによくないのかもしれないと同情する。

自分に向けられているわけでもないのに、悠真は無意識のうちにライアンの陰に隠れてしまった。

大丈夫だというように、ライアンがポンポンと背中を叩いてくれる。

そして、冷たい声でキツパリと申し出を拒否した。

『ノーだ。一緒に回るつもりはない。失礼』

そう言って悠真の手を取り、速足で歩き始める。

ギュッと強く手を握られた悠真は、ドキリとしてしまった。

『待って！』

『ちょっと！』

引き留める声が聞こえるが、人混みを縫って振りきってしまう。それでも繋いだ手は離されることなく、悠真の内心での動揺は止まらない。

『いいの？』

『聞く態度を見せると、延々と話し続けるからな』

『さすが、慣れてる……』

こんな場面を見せつけられるたびに、感心させられる。押しの強い女性たちから求愛を受けてきた経験からなのか、まったく取りつく島なく断るのだ。

おかげで大抵の女性は怯んでくれるし、しつこい女性は軽い威圧で動けなくして逃げることもある。

そんなことがしょっちゅうだから大変だなあと思い、それでいてどんな美女にもまったく心を動かされる様子のないライアンに感慨深いものがあった。

だってライアンは、悠真の手を握ったままなのである。そして、先ほどの冷たさがウソのように悠真に優しい表情を向けてくれている。

ライアンがあまりにも自分以外に無関心なので、好きだという言葉も信じてもいいんじゃない

かという気持ちになりつつあった。

ライアンと将宗は、青い瞳以外は似たところがない。ライアンは金髪のキラキラ王子様顔だが、将宗は黒髪の日本男児といった容姿だ。

けれどライアンの態度に悠希しか見ない将宗と同じものを感じ、それが信頼へと繋がっている。

ライアンと一緒に時間を積み重ねるにつれ、彼への好意は膨れ上がっていた。

作品の詳細や最新情報はダリア公式サイト「ダリアカフェ」をご覧ください。

ダリア公式サイト「ダリアカフェ」

<http://www.fwinc.jp/daria/>